優秀賞

後悔と未来

横須賀市立池上中学校三年　　大　原　万由子

「死ね」「キモい」「ウザイ」

時折、こんな言葉を耳にする。その度、私は一つの出来事を思い出す。そして、心の中で問いかけるのだ。「もし、明日、本当にその人がいなくなってしまったら、あなたは後悔しませんか。」と。

六年前の二〇一一年二月。小学二年生だった私は決して発してはならない言葉を口にし、今現在も悩み、苦しみ、後悔している。

幼いころの私は、毎年二月が楽しみだった。何故かというと、宮城に住む祖父母が手作りのくるみ餅を送ってきてくれるからだ。遠くに住んでいてなかなか会えない祖父母を身近に感じることができたし、何よりそのくるみ餅は最高に美味しくて大好物だったからである。しかし、その年はくるみが不作だったらしく、祖父母から届いた荷物の中にはくるみ餅は入っていなかった。当時の私は烈火のごとく怒った。お礼の電話をかける母の横でふてくされた。おそらく祖母が私と話したいと言ってくれたらしい。無理矢理受話器を押

しつけられた私の対応は冷たいものだった。
「まゆちゃん？　ごめんねぇ。今年はくるみがならなくてねぇ。来年は送るからねぇ。」
優しく声をかけてくれた祖母に私が返した言葉は、
「何で？　くるみ餅くらい食べさせてよ。まじウザい。もう電話してこないでいいから。」だった。そして、受話器を母に返し、祖母と話すことはなかった。
　その一ヶ月後。二〇一一年三月一一日。強い震れで小学校から集団下校した私が、家のテレビで見たのは宮城、岩手、福島のがれきでいっぱいの町や津波の映像だった。
「えっ。どうしたの。おじいちゃんは、おばあちゃんは大丈夫なの。」
と尋ねる私に、父はゆっくり首を横に振った。
「連絡が・・・。とれないんだ。」
その言葉を聞いた私は言葉がでなかった。
　祖父母が助からなかったということを聞いたのは、東日本大震災という呼び名が定着した震災の、三日後の朝だった。
「おじいちゃんとおばあちゃん、助からなかったみたいだ。」
泣くまいとして、無理に明るく言った父の顔は、こらえきれぬ悲しみがにじみでていた。

私はその夜、一人で泣いた。突然の別れが現実のものだと理解したとたん、涙が止まらなくなった。そして、ただひたすら後悔した。どうして、一ヶ月前、「大丈夫だよ。おばあちゃん、おじいちゃんは元気？」と一言、言えなかったのだろう。どうして、一方的に怒ったまま、謝りもせずに電話を母におしつけたのだろう。もう一度、話したかったのに。どうして、どうして、いなくなってしまったのー。

あれから六年がたち、私は今、中学三年生になった。私も周りも成長し、体も心も大きくなった。でも、周囲には悪意のある言葉があふれているし、実際にトラブルだって起きている。そんな中、クラスでは当たり前のように「ウザい」「マジキモい」「お前死ねよ！」といった言葉が飛びかう。冗談のつもりで言っているものもあれば、悪意がむき出しのものもある。

いずれにせよ、私はそれを注意することができなかった。（皆からどう思われるのだろう・・・。次は私かも・・・。）などと思ってしまうと、声をかけることができず、見て見ぬふりをしてしまっていた。私はそんな自分が嫌いだった。一ヶ月前、彼女に出会うまでは。

一ヶ月前、下校中のことだった。いつもとは少し違うメンバーで帰っていた。他愛ないおしゃべりにトゲが刺さったのはいつだった

のだろうか。話はある女の子の悪口になった。いつも通り、聞こえないふりをした私に、友達が、

「ねぇ、まゆちゃんもそう思うでしょ？」と話をふられた。返答に困っていると、別の友達から声がかかった。

「ねぇ。その話やめよ？それよりさぁ・・・。」

やんわりと、しかしはっきりとしたその声は私たちの話題を変えるのには十分だった。普段は物静かな彼女には珍しい発言だったが、それは私に小さな勇気を与える出来事だった。それからは私も、一回だけだが、別の日に悪口で盛り上がっていたのをやんわりと注意することができた。

それでもこれから、注意するべきか悩む弱い自分がでてくるだろう。そうしたら、祖父母と彼女のことを思い出し、勇気を振りしぼって声をかけたい。自分も気を付けたい。傷つく人、後悔する人が増えないようにー。

私の後悔は一生消えないし、消えてはならないと思う。しかし、自分が恥じないような生き方をしたい。そんな自分になったら、祖父母のお墓に報告しよう。「ありがとう。こんな大人になりました。」と。